

『訓蒙図彙』頭書本の成立
—寛文六年初版本・寛文八年頭書本「果臝」類の本文異同をめぐって—
An Analysis of the Headnotes in the Fruits Section of *Kinmōzui*:
Comparing the 1666 First Edition and the Annotated Edition of 1668

張 艶軍
ZHANG Yanjun

摘要：

『訓蒙図彙』現存版本有寛文六年初版本、寛文八年頭書本、寛文九年～元禄五年版本、元禄八年版本、寛政元年版本。在这五种版本中，除寛文六年初版本之外，其他四种版本的本文都是以头书的形式体现出来的。本文将寛文六年初版本和寛文八年頭書本の本文进行比较，试图弄清楚寛文八年頭書本中头书的特点。

キーワード：訓蒙図彙 頭書 絵入り 寛文六年 寛文八年

はじめに

日本最初の絵入り百科事典、中村楊齋撰『訓蒙図彙』は、寛文六年（一六六六）初版刊行後、増補改訂を加えながら版を重ねた。木村陽二郎氏（1）、小林祥次郎氏（2）、石上阿希氏（3）、楊世瑾氏（4）の調査に拠れば、現存する『訓蒙図彙』版本は、次の五種である。所蔵は、本稿で調査の対象とした版本である。

- ①寛文六年（一六六六）刊初版・中村楊齋撰『訓蒙図彙』二十卷十四冊
所蔵：国立国会図書館蔵「寛文六年山形屋刊」（請求記号一一七一八）。
- ②寛文八年（一六六八）刊・中村楊齋撰『訓蒙図彙』二十卷（冊数不明）。
所蔵：相田満氏蔵「寛文戊申季冬 書肆 山形屋重梓」
- ③寛文九年（一六六九）～元禄五年（一六九二）刊・撰者未詳『増補／訓蒙図彙』二十卷八冊
所蔵：東京芸術大学付属図書館蔵本・無刊記（請求記号 DIG-TKGL-47）。
- ④元禄八年（一六九五）刊・撰者未詳『頭書増補／訓蒙図彙』二十一卷十冊
所蔵：国立国会図書館蔵「元禄八年刊」（請求記号：特一一一九四〇）。
- ⑤寛政元年（一七八九）刊・撰者未詳『頭書増補／訓蒙図彙大成』二十一卷十冊
所蔵：国立国会図書館蔵「寛政元年皇都書林九阜堂刊」（請求記号：特一一一六一四）。

『訓蒙図彙』は、①寛文六年初版本（以下、①初版本と略称）の後、わずか二年後の寛文八年（一六六八）には、様式の異なる別版が刊行されている。②寛文八年（一六六八）刊『訓蒙図彙』（以下、②頭書本と略称）は、初めて本文に「^{かしらがき}頭書」を付し、版面を二段組の様式に改めた。この版種について、木村陽二郎氏は、
図は初版の一面二図を四図としていて、上下左右を縮めている。図そのものはほとんど変らぬが、もちろん初版の版木を削って再版にもちいたものではなく、あらたに彫りなおし、そのため図はすこし劣る。図に附す文句は皆初版に同じであるが、初版には図の横にあった文句を図の上に書き、頭書としている（5）。

小林祥次郎氏は、

本文の説明は寛文六年版のものと同文であり、図も寛文六年版のそれを縮小し縦長にしたものである。縮刷廉価版として刊行したものであろう（6）。

石上阿希氏は、

寛文六年版と比較して冊数を半分程度に減らしたことは確実である。寛文六年版で刊記や尾題調整など

細かい改板を何度も行ってきた山形屋が、より広い読者層に販売するために、図を縮小して冊数を少なくした廉価版を作ったと考えられる（7）。

楊世瑾氏は、次のように論じられた。

②寛文八年版本は、版面構成が大きく変容し、項目・本文の内容・図像の図柄は初版本を踏襲しつつも、まま改変する箇所もある。半丁に四項目を配し、図像を縮小し、掲出語・本文・図像の組み合わせが変えられ、一部の図像には着色された版本が確認される（8）。

『訓蒙図彙』の「頭書」という点でいえば、版面の構成を変えたこの②寛文八年頭書本が、初めて『訓蒙図彙』に「頭書」を付した版である。しかし、同じ版元から出版された①初版本の本文を継承する②寛文八年頭書本の存在は、看過されがちであった。むしろ、研究史のうえでは、大きく版面を刷新した④元禄版本の「頭書」が、頭書本として強く印象づけられてきた。例えば、④元禄版本について、勝又基氏は、

本書の大きな改編は二点。頭書（^{とうしょ}版本の上欄に置いた注釈）が加わった事と、項目が大幅に増補された事である（9）。

石上阿希氏は、

「頭書増補」と冠に付けた通り、各図の上部に注釈文が加えられ、各部門に項目が追加された（10）。

楊世瑾氏は、次のように述べておられる。

元禄版本の本文は、漢字平仮名交じりの日本文（和文）の頭書になり、ほとんどの漢字に振り仮名を付し、書体も日用の書体である行草書体を用いることになった（11）。

そもそも、『訓蒙図彙』①寛文六年初版本には「頭書」はない。しかし、①初版本刊行のわずか二年後には、「頭書」を付した②寛文八年頭書本が刊行されている。本稿は、『訓蒙図彙』「果蓏」類をひとつの雛形とし、①初版本と②頭書本の本文を比較することによって、初めて『訓蒙図彙』に「頭書」を付した②頭書本の「頭書」の性格の一面をあきらかにする。

一、『訓蒙図彙』「果蓏」類②寛文八年頭書本の「頭書」

図1・2は『訓蒙図彙』①初版本・②頭書本「果蓏」類の第一丁ウ・二丁オと一丁オの見開き版面である。



①初版本

②頭書本

①②とも、版面を上下二段に分ち、本文と図は界線で区切る。①初版本は、半丁に二項目を掲載し、右に本文、左に図を配す。②頭書本は、版面を上下二段に分ち、半丁に四項目を掲載、項目内の本文は図の上に配して頭書とし、本文と図の間は界線で区切る。

②頭書本は、①初版本を元に新たに版を起こしたものである。したがって、従来、この両者の本文・図は、ほぼ同じとされてきた。しかし、詳細に調査したところ、両者の本文には多くの異同が確認された。

二、『訓蒙図彙』①寛文六年初版本・②寛文八年頭書本の「果臚」類の本文

表1は、①初版本と②頭書本の『訓蒙図彙』「果臚」類52項目すべての本文を対照して示したものである。
 ①②の本文の異同は太字で示した。□は文字の脱落である。句読点や中黒は仮に私に付した。

表1・『訓蒙図彙』①寛文六年初版本・②寛文八年頭書本「果臚」類本文

	『訓蒙図彙』①寛文六年初版本「果臚」類本文	『訓蒙図彙』②寛文八年頭書本「果臚」類本文
①杏	杏 <small>きやう</small> からもゝ。今云あんず。杏 <small>きやうし</small> 子之唐 <small>てい</small> 音也。凡果實皆稱 <small>ス</small> 子。	杏 <small>きやう</small> からもゝ。今云あんず。杏 <small>きやうし</small> 子之唐 <small>てい</small> 音也。凡果實皆稱 <small>ス</small> 子。
②梅	梅 <small>ばい</small> むめ○白 <small>はくばい</small> 梅、むめぼし。梅 <small>ばいしやう</small> 醬、むめづけ。	梅 <small>ばい</small> むめ□白 <small>はくばい</small> 梅、むめぼし。梅 <small>ばいしやう</small> 醬、むめづけ。
③桃	桃 <small>たう</small> もゝ○油 <small>ゆ</small> 桃、今按つばきもゝ。又云つばいもゝ。李 <small>りたう</small> 桃、光 <small>くわうたう</small> 桃、並同。桃 <small>ニ</small> 花有 <small>こうたう</small> 紅 <small>ひたう</small> 桃、緋 <small>はい</small> 桃、白 <small>はくたう</small> 桃。	桃 <small>たう</small> もゝ□油 <small>ゆ</small> 桃、今按つばきもゝ。□□□□□□□。李 <small>りたう</small> 桃、光 <small>くわうたう</small> 桃、並同。桃 <small>ニ</small> 花有 <small>こうたう</small> 紅 <small>ひたう</small> 桃、緋 <small>はい</small> 桃、白 <small>はくたう</small> 桃。
④李	李 <small>り</small> すもゝ○李、麥 <small>メ</small> 熟而實、名 <small>ナ</small> 麥 <small>メ</small> 李 <small>リ</small> 。さもゝ。	李 <small>り</small> すもゝ□李、麥 <small>メ</small> 熟而實、名 <small>ナ</small> 麥 <small>メ</small> 李 <small>リ</small> 。さもゝ。
⑤梨	梨 <small>り</small> なし○消 <small>せうり</small> 梨、今按あをなし。雪 <small>せつり</small> 梨、今按こがなし。空 <small>こが</small> 閑、地名也。	梨 <small>り</small> なし□消 <small>せうり</small> 梨、今按あをなし。雪 <small>せつり</small> 梨、今按こがなし。空 <small>こが</small> 閑、地名也。
⑥柰	柰 <small>だい</small> からなし・ふなゑ。榛同。長 <small>ナ</small> 大 <small>ダイ</small> 者為 <small>ヲ</small> 柰。圓 <small>ワ</small> 者為 <small>ヲ</small> 林 <small>リン</small> 橋。	柰 <small>だい</small> からなし・ふなゑ。榛同。長 <small>ナ</small> 大 <small>ダイ</small> 者為 <small>ヲ</small> 柰。圓 <small>ワ</small> 者為 <small>ヲ</small> 林 <small>リン</small> 橋。
⑦棗	棗 <small>さう</small> なつめ。大 <small>たいさう</small> 棗也○乾 <small>かんさう</small> 棗、ほしなつめ。	棗 <small>さう</small> なつめ。大 <small>たいさう</small> 棗也○乾 <small>かんさう</small> 棗、ほしなつめ。
⑧栗	栗 <small>りつ</small> くり○茅 <small>ほうりつ</small> 栗、しばぐり。椀 <small>ばんし</small> 子、さゝぐり。今按二名一種。又按錐 <small>すいりつ</small> 栗。俗云ひよく。栗 <small>りつせつ</small> 椀、俗云しやくし。栗 <small>りつきさう</small> 毬、くりのいが。栗 <small>りつかく</small> 殼、くりのかは。栗 <small>りつふ</small> 扶、くりのしぶ。	栗 <small>りつ</small> くり○茅 <small>ほうりつ</small> 栗、しばぐり。椀 <small>ばんし</small> 子、さゝぐり。今按二名一種。又按錐 <small>すいりつ</small> 栗。俗云ひよく。栗 <small>りつせつ</small> 椀、俗云しやくし。栗 <small>りつきさう</small> 毬、くりのいが。栗 <small>りつかく</small> 殼、くりのかは。栗 <small>りつふ</small> 扶、くりのしぶ。
⑨柚	柚 <small>いう</small> 今按橙 <small>たうし</small> 子、あへたちばな。俗云柚所 <small>ゆ</small> 圖 盖是也。柚 <small>いうしへ</small> 子、俗云かぶし之屬歟。	柚 <small>いう</small> 今按橙 <small>たうし</small> 子、あへたちばな。俗云柚所 <small>ゆ</small> 圖 盖是也。柚 <small>いうしへ</small> 子、俗云かぶし之屬歟。
⑩柑	柑 <small>かん</small> 柑 <small>かんし</small> 子也。俗云くねんぼ之屬。或云此方無真柑。	柑 <small>かん</small> 柑 <small>かんし</small> 子也。俗云くねんぼ之屬。或云此方無真柑。
⑪枳	枳 <small>し</small> からたちばな□からたち。枳 <small>しじつ</small> 實也。其皮為 <small>ヲ</small> 枳 <small>しかく</small> 殼。俗音きこく。	枳 <small>し</small> からたちばな○からたち。枳 <small>しじつ</small> 實也。其皮為 <small>ヲ</small> 枳 <small>しかく</small> 殼。俗音きこく。
⑫橘	橘 <small>きつ</small> たちばな。蜜 <small>みみつ</small> 橘也。俗云蜜柑○包 <small>みかん</small> 橘、今云かうじ。橘皮、きがは。	橘 <small>きつ</small> たちばな。蜜 <small>みみつ</small> 橘也。俗云蜜柑○包 <small>みかん</small> 橘、今云かうじ。橘皮、きがは。
⑬榲	榲 <small>ひ</small> かへ・かや。榲 <small>ひし</small> 子也。棐 <small>ひ</small> ・榲 <small>ひし</small> ・榲 <small>ひし</small> 子・赤 <small>せきくわ</small> 果、並同。一曰榲 <small>ひ</small> 子、鹿 <small>ろく</small> 榲也。圓而大。	榲 <small>ひ</small> かへ・かや。榲 <small>ひし</small> 子也。棐 <small>ひ</small> ・榲 <small>ひし</small> ・榲 <small>ひし</small> 子・赤 <small>せきくわ</small> 果、並同。一曰榲 <small>ひ</small> 子、鹿 <small>ろく</small> 榲也。圓而大。
⑭榛	榛 <small>しん</small> はしばみ。榛 <small>しんし</small> 子也。{辛+木}同。又名小栗、名 <small>シんくわ</small> 秦果。	榛 <small>しん</small> はしばみ。榛 <small>しんし</small> 子也。{辛+木}同。又名小栗、名 <small>シんくわ</small> 秦果。
⑮椎	椎 <small>すい</small> しひ。今按椎、科 <small>へ</small> 子也。或作錐、盖擬 <small>ニ</small> 其形也。然字未詳。今所圖者、盖甘 <small>かんしよ</small> 橘也。一名 <small>こりつ</small> 鉤栗。又按{楮+見}亦同。	椎 <small>すい</small> しひ。今按椎、科 <small>へ</small> 子也。或作錐、盖擬 <small>ニ</small> 其形也。然字未詳。今所圖者、盖甘 <small>かんしよ</small> 橘也。一名 <small>こりつ</small> 鉤栗。又按{楮+見}亦同。

⑯柿	柿 かき。俗作 _レ 柿。今按柿、總名也。紅柿・蒸餅柿、同。棹子、ござはし。朱柿、同。漆柿、しぶかき。蓋柿、ゑんざがき。鹿心柿、ふでがき。	柿 かき。俗作 _レ 柿。今按柿、總名也。紅柿・蒸餅柿、同。棹子、ござはし。朱柿、同。漆柿、しぶかき。蓋柿、ゑんざがき。鹿心柿、ふでがき。
⑰莓	莓 いちご。莓子・蔗子、並總名也。覆盆子、つるいちご。藜苳・寒莓、並同。樹莓、きいちご。木莓・山莓・懸鉤子、並同。蛇莓、へびいちご。	莓 いちご。莓子・蔗子、並總名也。覆盆子、つるいちご。藜苳・寒莓、並同。樹莓、きいちご。木莓・山莓・懸鉤子、□□。蛇莓、へびいちご。
⑱菱	菱 ひし。菱角也。淺菱、並同。或云三角・四角曰 _レ 菱、兩角曰 _レ 菱。	菱 ひし。菱角也。淺菱、並同。或云三角・四角曰 _レ 菱、兩角曰 _レ 菱。
⑲椒	椒 なるはじかみ・かははじかみ。俗云山椒。大椒・花椒・秦椒、並同○蜀椒、俗云あさくら。山椒・川椒・南椒、並同。□椒皮曰 _レ 椒紅。内子曰 _レ 椒目。	椒 なるはじかみ・かははじかみ。俗云山椒・大椒・花椒・秦椒、□□○蜀椒、俗云あさくら。□□・川椒・南椒、並同。山椒皮曰 _レ 椒紅。内子曰 _レ 椒目。
⑳茶	茶 俗音ちゃ、又音さ、並未詳。本作 _レ 茶。今按茶、早採為 _レ 茶、晚採為 _レ 茗。或亦通用。凡治 _レ 葉為 _レ 芽茶。成 _レ 餅為 _レ 蠟茶。作 _レ 粉為 _レ 茶末。	茶 俗音ちゃ、又音さ、並未詳。本作 _レ 茶。今按茶、早採為 _レ 茶、晚採為 _レ 茗。或亦通用。凡治 _レ 葉為 _レ 芽茶。成 _レ 餅為 _レ 蠟茶。作 _レ 粉為 _レ 茶末。
㉑蒂	蒂 ほぞ。瓜脱 _レ 蔓之處也。又柿茄之蒂。俗云へた。或作 _レ 蒂、通作 _レ 寔。	蒂 ほぞ。瓜脱 _レ 蔓之處也。又柿茄之蒂。俗云へた。或作 _レ 蒂、通作 _レ 寔。
㉒菜	菜 かさ。又作 _レ 棊。今按櫛・櫛之屬。盛 _レ 實之房曰 _レ 菜、又曰 _レ 斗。	菜 かさ。又作 _レ 棊。今按櫛・櫛之屬。盛 _レ 實之房曰 _レ 菜、又曰 _レ 斗。
㉓核	核 さね。	核 さね。
㉔仁	仁 人同。	仁 人同。
㉕榴	榴 俗音ざくろ。安石榴也。若榴同。實有 _二 酸・甘 _一 二種。花有 _二 火榴・白榴・千葉榴 _一 之品。	榴 俗音ざくろ。安石榴也。若榴同。實有 _二 酸・甘 _一 二種。花有 _二 火榴・白榴・千葉榴 _一 之品。
㉖來禽	來禽 林檎也。此云りうごう。今云りんごう。盖皆音誤也。	來禽 林檎也。此云りうごう。今云りんごう。盖皆音誤也。
㉗葡萄	葡萄 えび。俗音ぶだう。蒲桃同○紫葡萄、今按くろぶだう。野葡萄、いぬえび。	葡萄 えび。俗音ぶだう。蒲桃同○紫葡萄、今按くろぶだう。野葡萄、いぬえび。
㉘胡頹	胡頹 ぐみ・もろなり。胡頹子也○實圓而不 _レ 長名 _二 野櫻桃 _一 。	胡頹 ぐみ・もろなり。胡頹子也○實圓而不 _レ 長名 _二 野櫻桃 _一 。
㉙香櫞	香櫞 佛手柑也。枸櫞・香圓、並同。	香櫞 佛手柑也。枸櫞・香圓、並同。
㉚荔支	荔支 唐音りいち。荔枝・離支、並同。	荔支 唐音りいち。荔枝・離支、並同。
㉛勃臍	勃臍 くはい。芋・齊・烏芋・地栗・薺、此・薺次、並同。今按皮・黒肉・硬者、名 _二 櫛芋齊 _一 。皮紫肉軟者、名 _二 羊芋齊 _一 。	勃臍 くわい。芋・齊・烏芋・地栗・薺、此・薺次、並同。今按皮・黒肉・硬者、名 _二 櫛芋齊 _一 。皮紫肉軟者、名 _二 羊芋齊 _一 。
㉜慈姑	慈姑 おもだか。俗云しろぐはい。茨菰同○苗名 _二 剪刀草・燕尾草 _一 。	慈姑 をもだか。俗云しろぐはい。茨菰同○苗名 _二 剪刀草・燕尾草 _一 。
㉝金柑	金柑 ひめたちばな。金橘・盧橘、並同。	金柑 ひめたちばな。金橘・盧橘、並同。

④銀杏	銀杏 俗云ぎんあん。杏從唐音。一名白果。銀杏樹、一名鴨脚樹、いちやう。	銀杏 俗云ぎんあん。杏從唐音。一名白果。銀杏樹、一名鴨脚樹、いちやう。
⑤枇杷	枇杷 こふくべ。俗音びは。一名炎果。或以此為盧橘。	枇杷 こふくべ。俗音びは。一名炎果。或以此為盧橘。
⑥枳椇	枳椇 けん。俗云けんほのなし。枳椇・椇椇・木蜜・木錫・枳棗。木名白石木・金鉤木。	枳椇 けん。俗云けんほのなし。枳椇・椇椇・木蜜・木錫・枳棗。木名白石木・金鉤木。
⑦楊梅	楊梅 やまもゝ。一名机子。白者名水晶楊梅。	楊梅 やまもゝ。一名机子。白者名水晶楊梅。
⑧椶棗	椶棗 今按、俗云ぶたうがき、或云さるがき。椶棗・軟棗・牛奶柿・丁香柿、並同。	椶棗 今按、俗云ぶたうがき、或云さるがき。椶棗・軟棗・牛奶柿・丁香柿、並同。
⑨木瓜	木瓜 もけ。俗云ぼけ。今按皆音誤也。一名楸。又木瓜、大而如瓜所圖、盖櫃子也。木桃同。	木瓜 もけ。俗云ぼけ。今按皆音誤也。一名楸。又木瓜、大而如瓜所圖、盖櫃子也。木桃同。
⑩松子	松子 からまつのみ。海松子也。又名新羅松子。	松子 からまつのみ。海松子也。又名新羅松子。
⑪榲桲	榲桲 番語まるめろ。	榲桲 番語まるめろ。
⑫龍眼	龍眼 圓眼・荔奴、並同。又有黃龍眼。	龍眼 圓眼・荔奴、並同。又有黃龍眼。
⑬鴉瓜	鴉瓜 からすうり。王瓜謂之老鴉瓜。又名土瓜・菟瓜・赤電子。	鴉瓜 からすうり。王瓜謂之老鴉瓜。又名土瓜・菟瓜・赤電子。
⑭燕覆	燕覆 あけび。燕覆子也。又名烏覆子。桴椶子。藤名通草・木通。	燕覆 あけび。燕覆子也。又名烏覆子。桴椶子。藤名通草・木通。
⑮甘蔗	甘蔗 俗云さたうだけ。一名竿蔗。	甘蔗 俗云さたうだけ。一名竿蔗。
⑯沙糖	沙糖 蔗糖同。白名白糖・糖霜。黒名紫糖。凝名冰糖・石蜜。化名沙蜜。	沙糖 蔗糖同。白名白糖・糖霜。黒名紫糖。凝名冰糖・石蜜。化名沙蜜。
⑰胡桃	胡桃 くるみ。又名核桃・核果。今按胡桃大者、俗云たうぐるみ。此間所在、盖山胡桃也。	胡桃 くるみ。又名核桃・核果。今按胡桃大者、俗云たうぐるみ。此間所在、盖山胡桃也。
⑱胡椒	胡椒 まるはじかみ。又名木奴・胡辛。	胡椒 まるはじかみ。又名木奴・胡辛。
⑲甜瓜	甜瓜 からうり。又名甘瓜・果瓜。今按、有長團・尖・區數種。所圖、盖黃瓢瓜也。	甜瓜 からうり。又名甘瓜・果瓜。今按、有長團・尖・區數種。所圖、盖黃瓢瓜也。
⑳苦瓜	苦瓜 俗云れいし。又名錦荔枝・癩葡萄。	苦瓜 俗云れいし。又名錦荔枝・癩葡萄。
㉑白柿	白柿 俗云つりがき。乾柿・柿乾・柿餅、並同。柿霜、今按かきのしも。柿鱈、かきづき。	白柿 俗云つりがき。乾柿・柿乾・柿餅、並同。柿霜、今按かきのしも。柿鱈、かきづき。
㉒烏柿	烏柿 俗云、あまぼし。火柿同。醃柿、さはしがき、又云あはせがき。烘柿、つゝみがき。	烏柿 俗云、あまぼし。火柿同。醃柿、さはしがき、又云あはせがき。烘柿、つゝみがき。

三、寛文八年頭書本「果蔬」類本文における「訓点」の省略

第一に、頭書本には、「たて点（合符）」の省略が52項目中、35項目72箇所に確認された。

- ①杏：「唐音」－「唐音」。②梅：「梅醬」－「梅醬」。③桃：「油桃」－「油桃」。④梨：「消梨」「雪梨」－「消梨」「雪梨」。⑤梨：「消梨」「雪梨」。⑥栗：「杭子」「二名」「栗楔」「栗毬」「栗殼」「栗扶」－「杭子」「二

名「栗楔」「栗毬」「栗殼」「栗扶」。⑨柚：「橙-子」「是-也」「柚-子」「是也」「柚-子」。⑩柑：「柑-子」「柑-子」。⑪枳：「枳-實」「俗-音」「枳實」「俗音」。⑫橘：「蜜-柑」「包-橘」「蜜柑」「包橘」。⑬榛：「榛-子」「秦-果」「榛子」「秦果」。⑭椎：「今所圖者」「一-名」「今所圖者」「一-名」。⑮柿：「今按柿、總-名也」「紅-柿・蒸-餅-柿、同」「棹-子」「朱-柿」「漆-柿」「鹿-心-柿」「今按柿、總-名也」「紅-柿・蒸-餅-柿、同」「棹-子」「朱-柿」「漆-柿」「鹿-心-柿」。⑯莓：「總-名」「覆-盆-子」「藪-益・寒-母、並-同」「樹-莓」「木-莓・山-莓・懸-鉤-子、並-同」「蛇-莓」。「總-名」「覆-盆-子」「藪-益・寒-母、並-同」「樹-莓」「木-莓・山-莓・懸-鉤-子、並-同」「蛇-莓」。⑰椒：「秦-椒」「蜀-椒」「山-椒・川-椒・南-椒、並-同」「□-椒-皮」「秦-椒」「蜀-椒」「□-□-川-椒・南-椒、並-同」「山-椒-皮」。⑱茶：「早-採」「晚-採」「蠟-茶」「作粉為茶末」。「早-採」「晚-採」「蠟-茶」「作粉為茶末」。⑲蒂：「蔓」「蔓」。⑳榴榴：「安-石-榴」「二-種」「安-石-榴」「二-種」。㉑來禽：「林-檣」「林-檣」。㉒葡萄：「蒲-桃」「紫-葡-萄」「蒲-桃」「紫-葡-萄」。㉓胡頹：「胡-頹-子」「不-長」。「胡-頹-子」「不-長」。㉔香櫞：「佛-手-柑」「並-同」「佛-手-柑」「並-同」。㉕荔枝：「皮-黑」「羊-孛-齊」「皮-黑」「羊-孛-齊」。㉖慈姑：「燕-尾-草」「燕-尾-草」。㉗金柑：「金-橘・盧-橘」「金-橘・盧-橘」。㉘枇杷：「一-名」「一-名」。㉙枳椇：「木-蜜・木-錫・枳-棗」「木-蜜・木-錫・枳-棗」。㉚楊梅：「白-者」「水-晶-楊-梅」「白-者」「水-晶-楊-梅」。㉛棗棗：「軟-棗」「軟-棗」。㉜木瓜：「木-瓜」「木-瓜」。㉝松子：「海-松-子」「海-松-子」。㉞鴉瓜：「之」「赤-雹子」「赤-雹子」。㉟燕覆：「烏-覆-子」「桴-椶-子」「烏-覆-子」「桴-椶-子」。㊱胡桃：「俗-云」「此-間」「俗-云」「此-間」。㊲甜瓜：「匾」「匾」。㊳白柿：「柿-霜」「柿-霜」。

このうち、⑮椎・⑮柿・⑲茶・⑲蒂・㉓胡頹・㉕荔枝・㉞鴉瓜・㉟甜瓜は、「たて点」の省略だけでなく、「レ点」と「送り仮名」の省略もみられる。このことは、②頭書本が一丁に四項目を配したために余白が減り、文字数を詰める必要が生じ、最優先に訓点を削除するという方針を採ったためと考えられる。

四、『訓蒙図彙』「凡例」と②寛文八年頭書本「果蔬」類本文における圈「○」の省略

第二に、①初版本と②頭書本の本文には、いずれも圈「○」が見られる。しかし、その付しかたが異なっている。『訓蒙図彙』の圈「○」について、①初版本の「凡例」に次のように定義されている。

若一類而殊品一體而分支者則注中隔圈而附之
(若し、一類にして殊品、一体にして分支する者は、則ち、注中、圈を隔てて之を附す)

②頭書本の「凡例」も、まったく同文である。

若一類而殊品一體而分支者則注中隔圈而附之
(若し、一類にして殊品、一体にして分支する者は、則ち、注中、圈を隔てて之を附す)

すなわち、『訓蒙図彙』「凡例」は、一つの「類」の同じ品目(項目)のなかで、さらに細かい分類が可能なものには、本文のなかに圈「○」を付すと定めている。同じ「凡例」を掲げているにもかかわらず、両版本の圈「○」には、次の異同が確認された。

①初版本が圈「○」を付す項目は、②「梅」③「桃」④「李」⑤「梨」⑦「棗」⑧「栗」⑫「橘」⑬「椒」⑰「葡萄」⑱「胡頹」⑳「慈姑」㉒「銀杏」㉔「枳椇」㉚「楊梅」㉜「燕覆」㉞「沙糖」㉟「白柿」㊱「烏柿」である。

②頭書本が圈「○」を付す項目は、⑦「棗」⑧「栗」⑪「枳」⑫「橘」⑬「椒」⑰「葡萄」⑱「胡頹」㉒「慈姑」㉒「銀杏」㉔「枳椇」㉚「楊梅」㉜「燕覆」㉞「沙糖」㉟「白柿」㊱「烏柿」である。

両者の異同は、②寛文八年頭書本②「梅」③「桃」④「李」⑤「梨」の四項目に、圈「○」がない点と①「枳」の一項目に、圈「○」を新たに付す点である。

ここで注目されるのは、①「枳」である。「枳」には二つの和語をあげる。その表記は、①初版本は「からたちばなからたち」、②頭書本は「からたちばな○からたち」である。つまり、二つの和語を、①初版本

は続けて書き、②頭書本は新たに圈「○」を付して隔てている。これは、①初版本の表記が「凡例」で示した原則にそぐわないため、②頭書本が「凡例」に即して改訂したものと考えられる。

ただし、⑥「柰」⑬「榧」⑲「椒」⑳「胡頹」にも、同じ異同がみられる。例えば、⑥「柰」で、①初版本の「からなし」と「ふなゑ」には、「凡例」にいう「圈を隔てて之を附」していないし、②頭書本もこれを修正していない。したがって、②頭書本の「凡例」に従った圈「○」の修正は、⑪「枳」のみに限られており、すべての改訂が徹底されているわけではない。②頭書本による修正の漏れが、⑥「柰」⑬「榧」⑲「椒」⑳「胡頹」に確認されるということになる。

これに対し、「果臚」類巻頭の②「梅」③「桃」④「李」（以上図1・2）⑤「梨」の四項目は、①初版本は、圈「○」を付しているが、②頭書本は付していない。共通するのは、すべて「果臚」類巻頭に配されている点である。これは巻頭の版面構成によるものと考えられるので、元禄版本との版面を比較した続稿を期す。

五、②寛文八年頭書本「果臚」類本文における「桃」「椒」「菱」本文の改変

本文の異同は、③「桃」と⑲「椒」の二項目に確認される。

第一に、③「桃」である。①初版本の③「桃」の本文は次の通りである。

【本文】桃 も、○油桃、今按つばきも、。又云つばいも、。李-桃・光-桃、並-同。桃-花有-紅-桃・
緋-桃・白-桃。

【訓読】桃 もも○油桃、今按ずるに、つばきもも。又云く、つばいもも。李桃・光桃、並に同じ。桃花
に紅桃・緋桃・白桃有り。

②頭書本の③「桃」の本文は次の通りである。

【本文】桃 も、□油桃、今按つばきも、。□□□□□□。李-桃・光-桃、並-同。桃-花有-紅-桃・
緋-桃・白-桃。

【訓読】桃 もも□油桃、今按ずるに、つばきもも。□□□□□□。李桃・光桃、並に同じ。桃
花に紅桃・緋桃・白桃有り。

①初版本は、「桃」の和語として「つばきも、」「今按つばきも、」の二語をあげる。しかし、②頭書本には「今按つばきも、」がない。「つばいも、」の「い」はイ音便で崩れた俗語的・口語的な語形である。そのため、②頭書本は、「又云つばいも、」を意識的に削除したのではないか。このような事例は「果臚」類ではこの一例だけである。

第二に、⑲「椒」である。①初版本の⑲「椒」の本文は次の通りである。

【本文】椒 なるはじかみ・かははじかみ。俗云山-椒。大-椒・花-椒・秦-椒、並-同○蜀-椒、俗
云あさくら。山-椒・川-椒・南-椒、並-同。□椒-皮 曰-椒-紅-。内-子 曰-椒-目-。

【訓読】椒 なるはじかみ・かははじかみ。俗に云く、山椒。大椒・花椒・秦椒、並に同じ○蜀椒、
俗に云く、あさくら。山椒・川椒・南椒、並に同じ。□椒皮を椒紅と曰ふ。内子を椒目と曰ふ。

②頭書本⑲「椒」の本文は次の通りである。

【本文】椒 なるはじかみ・かははじかみ。俗云山-椒・大-椒・花-椒・秦-椒、□□○蜀-椒、俗云あさくら。
□□・川-椒・南-椒、並同。山-椒皮 曰-椒-紅-。内-子 曰-椒-目-。

【訓読】椒 なるはじかみ・かははじかみ。俗に云く、山椒・大椒・花椒・秦椒、□□○蜀椒、俗に云く、
あさくら。□□・川椒・南椒、並に同じ。山椒皮を椒紅と曰ふ。内子を椒目と曰ふ。

両者の本文の異同は、第一に、②頭書本⑲「椒」の本文には「並-同」「山-椒」がない点、第二に、①初版本「椒-皮」を「山椒皮」と改変している点である。第二のたて点の省略は、他の事例と同じく、たて点のスペースを省略することが目的であろう。

重要なのは、第一の点である。①初版本本文は、「俗云」として、「山-椒・大-椒・花-椒・秦-椒、並-同」とする。第一義に「山-椒」をあげ、そのあと、「並-同」として異名「大-椒・花-椒・秦-椒」をあげるという形式である。

これに対して、②頭書本は「並同」がない。そのため、「山椒」を「俗云」のなかに入れた。これによって、本文は「山椒・大椒・花椒・秦椒」となり、四つの異名が同じ「俗云」として並列することになった。②頭書本は文字数を少しでも少なくするために「並同」を削除したが、そのために「山椒」が第一義であるとする、①初版本の「山椒」の位置づけを崩してしまったのである。

さらに、②頭書本が①初版本の「並同」の意味を軽視し、安易に削除する傾向は、⑰「苺」にも確認される。①初版本⑰「苺」の本文には、「木苺・山苺・懸鉤子、並同」として、末尾に「並同」が置かれる。ところが、②頭書本は、「木苺・山苺・懸鉤子、□□」に作り、末尾の「並同」を削除している。このことは、文字数を少しでも減らすために「並同」二文字の注記が、削除の対象とされていたことを意味するであろう。

②頭書本は、『訓蒙図彙』を「頭書」という様式に改めるために、少しでも文字数を減らすことに腐心した。それが、僅か一文字の削除であっても優先されたことは、次の事例から明らかである。

②頭書本の脱字の唯一例として、文末の「也」がある。

①初版本本文④⑨「甜瓜」「所^へ圖^す、盖黄^{わうじやう}瓢^{ひやう}瓜^{くわ}也」を、②頭書本は「所^へ圖^す、盖黄^{わうじやう}瓢^{ひやう}瓜^{くわ}□」に作る。これは文末の「也」字一字の脱落であるが、一文字でも文字数を少なくするための改訂とみてよいであろう。

このほか、「果臚」類においては、②頭書本本文の誤脱は、⑱「菱」に誤字一字が確認されただけであった。「果臚」類本文は表1に全文を掲げたように、かなりの分量がある。そのなかに誤字はわずか一例ということは、①初版本の本文を、②頭書本はかなり忠実に、慎重に写しとっていることを意味するであろう。

むすび

本稿では、現在確認される『訓蒙図彙』五種のうち、「頭書」を初めて付した②寛文八年頭書本の「頭書」本文を検討した。「果臚」類①初版本と②頭書本の本文の異同から、次のことが確認された。

第一に、②頭書本は、訓点、特にたて点を削除する。

第二に、②頭書本は、③「桃」の①初版本本文の「又云つばいも、」を削除するが、イ音便の俗語形であり、不要とみなしたのか。

第三に、②頭書本は、「並同」「也」などの文字を削除し、本文の文字数を減らす努力をしている。

第四に、②頭書本の誤字は、「果臚」類において、わずか一例、⑱「菱」の「日」を「四」に誤る点のみであった。

小林氏、石上氏が説かれたとおり、②頭書本は①初版本を縮刷した廉価版として刊行されたとみてよいであろう(12)。「果臚」類の調査結果にもとづく傾向としてはあるが、その本文継承の態度・姿勢は、第一に、①初版本の本文を注意深く写しとり、第二に、訓点、「並同」「也」を省略するなど、少しでも余白を減らして文字を詰めようとするものであった。その後刊行された後版、③寛文九年(一六六九)～元禄五年(一六九二)版、④元禄八年版、⑤寛政元年版の本文は、いずれも「頭書」という体裁をとる。『訓蒙図彙』の版本②③④⑤における「頭書」の性格、特に、本稿で指摘した②「梅」③「桃」④「李」⑤「梨」の圈「○」の脱落については、同じく「頭書」の体裁をもつ④元禄版本との関係を調査した別稿を用意している。

注

- (1) 木村陽二郎「中村惕斎の『訓蒙図彙』について」117-125頁(『教養学科紀要』5、一九七三年三月、東京大学教養学部教養学科)。
- (2) 小林祥次郎『『訓蒙図彙』解説と索引』969-975頁(『江戸のイラスト辞典 訓蒙図彙』、二〇一二年十月、勉誠出版)。
- (3) 石上阿希「江戸のことは絵事典『訓蒙図彙』の世界」313-330頁(二〇二一年三月、角川書店)。
- (4) 楊世瑾「『訓蒙図彙』寛文六年初版本から元禄版本へー大衆化の位相をめぐるー」(『文化・情報の結節点としての図像一絵と言葉でひろがる近世・近代の文化圏一』26頁、二〇二一年三月、晃洋書房)。
- (5) 注(1)の前掲論文120頁。
- (6) 注(2)の前掲書972頁。

- (7) 注(3)の前掲書 321 頁。
- (8) 注(4)の前掲論文 26 頁。
- (9) 勝又基「江戸の百科事典を読む『訓蒙図彙』の変遷」(『月刊しにか』3、67-68 頁、二〇〇〇年三月、大修館書店)。
- (10) 注(3)の前掲書 326 頁。
- (11) 注(4)の前掲論文 33 頁。
- (12) 注(2)(3)の前掲書に同じ。